毛沢東選集

第四卷

毛沢東選集

第四巻

外文出版社
北京

毛沢東選集　第四巻

1968年　初版発行
1977年　初版第三刷発行

定価　1200円（上）
500円（並）

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）

発行者　中国国際書店
（北京 P. O. Box 399）

編号：（日）1050—957

1—J—444
00330
00220

本訳書は北京人民出版社一九六四年九月出版の『毛沢東選集』第一巻から第四巻までの完訳である。各論文の解題と注釈もこの版から訳出したものである。

注釈は原注と訳注にわかれ、原注は漢数字を〔〕でかこみ、各論文の末尾においた。訳注は訳者がくわえたもので、算用数字を〇でかこみ、原注のあとにおいた。

度量衡、通貨、行政区画については、一部をのぞいてすべて原文のままの単位を用い、訳注を付した。

目次

第三次国内革命戦争の時期

抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針（一九四五年八月十三日）……3
蔣介石は内戦を挑発している（一九四五年八月十三日）……27
第十八集団軍総司令から蔣介石にあてた二通の電報（一九四五年八月）……35
蔣介石のスポークスマンの談話を評す（一九四五年八月十六日）……45
国民党と和平交渉をすすめることについての
　中国共産党中央の通達（一九四五年八月二十六日）……53
重慶交渉について（一九四五年十月十七日）……59
国民党進攻の真相（一九四五年十一月五日）……77
小作料引き下げと生産は
　解放区をまもる二つの重要な仕事である（一九四五年十一月七日）……85

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

一九四六年の解放区活動の方針（一九四五年十二月十五日）……89
強固な東北根拠地をきずこう（一九四五年十二月二十八日）……97
当面の国際情勢についてのいくつかの評価（一九四六年四月）……105
自衛戦争によって蔣介石の進攻を粉砕せよ（一九四六年七月二十日）……109
アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話（一九四六年八月）……119
優勢な兵力を集中して敵を各個に殲滅せよ（一九四六年九月十六日）……129
アメリカの「調停」の真相と中国の内戦の前途（一九四六年九月二十九日）……137
三ヵ月の総括（一九四六年十月一日）……143
中国革命の新しい高まりを迎えよう（一九四七年二月一日）……153
延安の一時放棄と陝西・甘粛・寧夏辺区の防衛についての
　中国共産党中央の二つの文書（一九四六年十一月、一九四七年四月）……167
西北戦場の作戦方針について（一九四七年四月十五日）……173
蔣介石政府はいまや全人民の包囲のなかにある（一九四七年五月三十日）……177
解放戦争第二年目の戦略方針（一九四七年九月一日）……185

中国人民解放軍宣言（一九四七年十月）……195
三大規律・八項注意をあらためて公布すること
　についての中国人民解放軍総司令部の訓令（一九四七年十月十日）……203
当面の情勢とわれわれの任務（一九四七年十二月二十五日）……207
報告制度の確立について（一九四八年一月七日）……235
当面の党の政策におけるいくつかの重要問題について（一九四八年一月十八日）……239
軍隊内の民主運動（一九四八年一月三十日）……251
異なった地区で土地法を実施するうえでの異なった戦術（一九四八年二月三日）……255
土地改革の宣伝における「左」翼的な誤りを是正せよ（一九四八年二月十一日）……259
新解放区における土地改革の要点（一九四八年二月十五日）……263
商工業政策について（一九四八年二月二十七日）……267
民族ブルジョア階級と開明紳士の問題について（一九四八年三月一日）……271
西北地方の大勝利を評し、あわせて
　解放軍の新しい型の整軍運動を論ず（一九四八年三月七日）……277

状況についての通報（一九四八年三月二十日）……287
山西・綏遠解放区幹部会議での演説（一九四八年四月一日）……299
晉綏日報の編集部の人たちにたいする談話（一九四八年四月二日）……317
洛陽再攻略ののち洛陽前線指揮本部にあてた電報（一九四八年四月八日）……325
新解放区における農村活動の戦術問題（一九四八年五月二十四日）……329
一九四八年の土地改革活動と整党活動（一九四八年五月二十五日）……331
遼瀋戦役の作戦方針について（一九四八年九月、十月）……341
党委員会制度の健全化について（一九四八年九月二十日）……351
九月会議にかんしての中国共産党中央の通達（一九四八年十月十日）……353
淮海戦役の作戦方針について（一九四八年十月十一日）……365
全世界の革命勢力は団結して帝国主義の侵略とたたかおう（一九四八年十一月）……371
中国の軍事情勢の重大な変化（一九四八年十一月十四日）……377
平津戦役の作戦方針について（一九四八年十二月十一日）……381
杜聿明らに降伏をうながす書（一九四八年十二月十七日）……389

革命を最後まで遂行せよ（一九四八年十二月三十日）……393
戦犯の和を乞うを評す（一九四九年一月五日）……407
中国共産党中央委員会毛沢東主席の時局にかんする声明（一九四九年一月十四日）……415
南京行政院の決議についての
中国共産党スポークスマンの論評（一九四九年一月二十一日）……421
元中国侵略日本軍総司令官岡村寧次の再逮捕と
国民党内戦犯罪人の逮捕を国民党反動政府に命令することについての中国共産党スポークスマンの談話（一九四九年一月二十八日）……425
和平条件に日本人戦犯と国民党戦犯の処罰をふくむべきことについての
中国共産党スポークスマンの声明（一九四九年二月五日）……437
軍隊を工作隊に変えよ（一九四九年二月八日）……443
四分五裂の反動派がなぜまだ
「全面的和平」の空念仏をとなえるのか（一九四九年二月十五日）……447
国民党反動派は「和平のよびかけ」から
戦争のよびかけに変わった（一九四九年二月十六日）……455
戦争責任の問題にたいする国民党のいくつかの答案を評す（一九四九年二月十八日）……459

中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告（一九四九年三月五日）……471
党委員会の活動方法（一九四九年三月十三日）……493
南京政府はどこへいく（一九四九年四月四日）……501
全国への進軍命令（一九四九年四月二十一日）……507
中国人民解放軍布告（一九四九年四月二十五日）……523
中国人民解放軍総司令部スポークスマンが
イギリス軍艦の暴虐行為について発表した声明（一九四九年四月三十日）……527
新政治協商会議準備会での演説（一九四九年六月十五日）……533
人民民主主義独裁について（一九四九年六月三十日）……539
幻想をすてて、闘争を準備せよ（一九四九年八月十四日）……561
さらば、スチュアート（一九四九年八月十八日）……573
なぜ白書を討論する必要があるのか（一九四九年八月二十八日）……585
「友情」か侵略か（一九四九年八月三十日）……593
観念論的歴史観の破産（一九四九年九月十六日）……599

第三次国内革命戦争の時期

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

抗日戦争勝利後の時局とわれわれの方針

（一九四五年八月十三日）

これは、毛沢東同志が延安での幹部会議でおこなった演説である。この演説は、マルクス・レーニン主義の階級分析の方法にもとづいて、抗日戦争勝利後の中国の政治の基本情勢にふかい分析をくわえるとともに、プロレタリア階級の革命的戦術を提起している。毛沢東同志が、一九四五年四月、中国共産党第七回全国代表大会の開会のことばで指摘したように、日本帝国主義をうちやぶってからも、中国のまえには、新しい中国となるか、それとも、ふるい中国のままでいるか、という二つの運命、二つの前途が依然としてよこたわっていた。蔣介石に代表される中国の大地主・大ブルジョア階級は、人民の手から抗日戦争の勝利の果実をうばいとり、中国をこれまでどおりの大地主・大ブルジョア階級独裁の、半植民地・半封建の国家にしようとしていた。プロレタリア階級と人民大衆の利益を代表する中国共産党は、一方では、極力、平和のためにたたかい内戦に反対しなければならず、他方では、全国的な規模の内戦をおこそうとする蔣介石の反革命の計画にたいしても十分なそなえをもち、正しい方針をとらなければならなかった。それはつまり、帝国主義と反動派にたいして、幻想をいだかず、そのおどかしをおそれず、断固として人民の闘

争の果実をまもりぬき、プロレタリア階級の指導する、人民大衆の、新民主主義の新中国をうちたてるために努力するということであった。中国の二つの運命、二つの前途の勝敗を決するたたかいが、抗日戦争の終結から中華人民共和国の成立にいたるまでのこの歴史的時期の内容であり、この歴史的時期とは、中国人民解放戦争の時期、または第三次国内革命戦争の時期のことである。蔣介石はアメリカ帝国主義の援助のもとに、抗日戦争の終結後、たびたび、和平についての取り決めをやぶるとともに、人民の力を一掃しようとして、空前の、大がかりな反革命の内戦をおこした。しかし、中国共産党の正しい指導により、中国人民はわずか四ヵ年のたたかいによって、全国的な範囲にわたって蔣介石をうちやぶり、新中国をうちたてるという偉大な勝利をかちとった。

この数日間、極東の時局にひじょうに大きな変動がおきている。日本帝国主義降伏の大勢はすでにさだまった。日本降伏の決定的な要因はソ連の参戦である。赤軍百万の大軍が中国の東北地方にはいったが、これは手向かうことのできない力である。日本帝国主義はもう戦争をつづけられなくなった(一)。中国人民の苦難にみちた抗戦はすでに勝利をおさめた。抗日戦争は、ひとつの歴史的段階としてはすでにすぎさったのである。

こうした情勢のもとで、中国国内の階級関係、国共両党の関係は、現在どうなっているか。将来はどうなるのか。わが党の方針はどうなのか。これは全国の人民が大きな関心をよせている問

題であり、全党の同志が大きな関心をよせている問題である。

国民党はどうなのか。その過去をみれば、その現在がわかるし、その過去と現在をみれば、その将来がわかる。この党は過去にまる十年間、反革命の内戦をおこなったことがある。抗日戦争中にも、国民党は、一九四〇年、一九四一年、一九四三年と三回にわたって、大がかりな反共の高まり〔二〕をひきおこしては、そのたびに全国的な内戦にもっていこうとした。ただそれがわが党の正しい政策と全国人民の反対によって実現をみなかっただけである。中国の大地主・大ブルジョア階級の政治的代表者である蔣介石（チャンチエシー）は、周知のように、このうえもなく残忍で陰険な男である。手をこまねいて勝利を待ち、実力を保存して内戦を準備する、というのがかれの政策であった。はたして、待ちのぞんだ勝利がおとずれ、この「委員長」はいよいよ「山をおりる」〔三〕ことになった。八年このかた、われわれと蔣介石は居場所をとりかえていた。以前はわれわれが山の上にいて、かれが水のほとりにいたが〔四〕、抗日の時期には、われわれが敵後方にいて、かれが山にのぼっていた。いま、かれは山をおりようとしている。山をおりて抗戦勝利の果実を横取りしようというわけである。

わが解放区の人民と軍隊は、この八年らい、ぜんぜんほかからの援助のない状況のもとで、まったく自分だけの努力によって、広大な国土を解放し、中国侵略日本軍の大部分とかいらい軍のほとんど全部を相手に戦ってきた。われわれの断固とした抗戦、英雄的な奮闘があったからこそ、大後方〔五〕の二億の人民は日本侵略者の蹂躙（じゅうりん）をまぬかれ、二億の人民のすむ土地は日本侵略

者の占領をまぬかれたのである。蔣介石は峨眉山（オーメイシャン）に逃げこんでいたが、前方でかれをまもってやったものがいた。それは解放区であり、解放区の人民と軍隊であった。われわれは大後方の二億の人民をまもったが、それは同時に、この「委員長」をもまもることになり、かれに、手をこまねいて勝利を待つ時間と場所をあたえた。時間――八年と一ヵ月、場所――二億の人民のすむ土地、これらの条件はわれわれがかれにあたえたのである。われわれがいなければ、かれも手をこまねいてはいられなかったはずである。それなら、「委員長」はわれわれに感謝しているだろうか。とんでもない。この男はむかしから恩知らずである。蔣介石はどのようにして権力の座についたか。北伐戦争のおかげであり、第一次国共合作のおかげであり、当時人民がまだかれの素性をよく知らずにかれを支持していたおかげである。かれはいったん権力の座につくと、人民に感謝するどころか、人民をはりたおし、人民を十年にわたる内戦の血の海につきおとした。このあたりの歴史は、同志諸君がみな知っているとおりである。こんどの抗日戦争で、中国人民はまたかれをまもってやった。いま、抗日戦争は勝利し、日本は降伏することになったが、かれはけっして人民に感謝はせず、逆に、一九二七年のふるい帳面をめくってみて、もう一度おなじ手を打とうと考えている。蔣介石は、中国にはこれまで「内戦」などなかった、あったのは「匪（ひぞく）賊討伐」だけだといっている。だが、それをなんとよぼうと、要するに、反人民的な内戦をおこそうとしているのであり、人民を殺そうとしているのである。

全国的な規模の内戦がまだおこらないうちは、人民のあいだでも、わが党の多くの同志のあい

だでも、まだこの問題について、みんながみんなはっきりした認識をもつわけではない。大規模な内戦がまだはじまっておらず、内戦がまだ普遍的な、公然とした、ひんぱんなものになっていないので、「まさか！」と考えている人がたくさんいるし、また、内戦になるのをおそれている人もたくさんいる。おそれるのにはわけがある。かつては十年間戦争をし、抗戦でまた八年間戦争をした、これ以上戦争をするのはたまらないからである。おそれる気持ちになるのも無理はない。内戦をおこそうとする蔣介石の陰謀にたいして、わが党がとっている方針は、明確であり、一貫している。それは、断固として内戦に反対することであり、内戦に賛成せず、内戦を阻止することである。今後さらに、われわれは最大の努力と辛抱づよさをもって人民を指導して、内戦をくいとめなければならない。しかし、内戦の危険性がひじょうに大きいことをはっきりと見ぬかなければならない。蔣介石の方針はもうきまっているからである。蔣介石の方針は、内戦をやることである。われわれの方針、人民の方針は、内戦をやらないことである。内戦をやらないのは中国共産党と中国人民だけで、残念ながら、蔣介石と国民党はそうではない。一方はやらないが、一方はやる。もし両方ともやらないのなら戦争にはならない。現在、やらないのは一方だけで、しかも、この一方にはまだ他の一方をおさえるだけの力がない。したがって、内戦の危険性はひじょうに大きい。

蔣介石が専制と内戦の反動的方針をあくまで固持しようとしていることを、わが党は時をうつさずはっきり指摘してきた。党の第七回代表大会以前にも、第七回代表大会の開催中にも、第七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook